

タイムスケジュール

- 17:00 開場 アートワークショップ (参加自由・無料)
 18:00 開演 対談 (教育学研究科 諸田大輔准教授 × 国吉康雄研究講座 江原久美子准教授)
 音楽演奏会
 20:00 終演 (予定)

『音楽と辿る国吉康雄の旅路』演奏リスト

No.1 国吉が求めたアメリカを形作ったもの「愛国心」と「理想」
 ルイス・モロー・ゴットシャルク『ザ・ユニオン—国民歌に基づくコンサート用パラフレーズ』

No.2 国吉が誕生した1889年・洋の東西が交流する
 クロード・アシル・ドビュッシー
 『スティリー風タランテッラ (舞曲) / Tarentelle styrienne (Danse)』

No.3 国吉が描いたフランス・黄金と喩えられる時代
 ジャック・オッフエンバック『地獄のギャロップ (天国と地獄)』

No.4 真のアメリカを表現するために・アメリカに暮らす誰もが求めたもの
 アントニン・ドヴォルザーク『弦楽四重奏曲第12番『アメリカ』第1楽章

No.5 アメリカのアメリカのための音楽
 ジョージ・ガーシュイン『ラプソディー・イン・ブルー』(室内楽版)

No.6 幼い時の記憶・日本への思い
 備前岡山獅子舞太鼓唄「こちやえ節」

No.7 独裁と抑圧に追われアメリカへ
 アルノルト・シェーンベルク『浄夜』より一部演奏

No.8 祭りは終わった・故国と育ての国の戦争
 アーロン・コーブラント『市民のためのファンファーレ』

No.9 アメリカが悲しむ時
 サミュエル・バーバー『アニウス・デイ (Agnus Dei)』

No.10 国吉が愛した歌曲
 スティーブン・フォスター
 『金髪のジェニー (Jeanie with the Light Brown Hair)』

No.11 パリを経ての革命〜誰一人として存在しないこと
 アストル・ピアソラ『来るべきもの (Lo que vendra)』

No.12 国吉と同じ歳の喜劇王の手によるスコア
 チャールズ・チャップリン『ライムライト / テリーのテーマ』

※やむを得ず、曲目等に変更が生じる場合がございます。何卒ご了承ください。

アートワークショップ

国吉康雄作品に登場する「仮面」をモチーフにした「お面ワークショップ」や、国吉作品の絵葉書や参加者自身の作品を額装する「額装ワークショップ」を実施します。17:00 から無料で自由に参加できます。

アクセス



- 岡山駅東口バスターミナル「4番乗り場」から「2H」系統の岡電バスで「大学病院」構内バス停下車 約10～15分
- 岡山駅東口バスターミナルから「12」・「22」・「52」・「62」・「92」系統の岡電バスで「大学病院入口」下車 約10～15分
- 岡山駅前（イコットニコット前または高島屋入口）から八見運輸の市内循環バス「医大めぐりん」で「大学病院入口」下車 約10～15分
- 岡山駅タクシー乗り場からタクシーで約5～10分

※ホールには専用の駐車場がございません。公共交通機関をご利用ください。



- No.1《自画像》1918年
- No.2《野性の馬》1921年
- No.3《パンダナをつけた女》1936年
- No.4《二人の赤ん坊》1923年
- No.5《水難救助員》1924年
- No.6《日本の張子の虎とからくた》1932年
- No.7《安眠を妨げる夢》1948年
- No.8《ここは私の遊び場》1947年
- No.9《蟹のぼり》1950年
- No.10《恋人たちの道》1946年
- No.11《通りの向こう側》1951年

全て国吉康雄作
 福武コレクション蔵

お問い合わせ先

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科
 《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》
 〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1
 Tel:086-289-5807
 Mail:s.ito@kuniyoshi-art-fes.com

国吉康雄プロジェクト 検索

Twitter.com / FesKuniyoshi
 Facebook.com / yasuo.kuniyoshi.pj
 instagram / kuniyoshi_art_fes2019
 HP / http://www.yasuo-kuniyoshi-pj.com/

特設ホームページ
 QRコード

国吉祭 2019 × J ホールレインボーコンサート 音楽と辿る国吉康雄の旅路

2019年10月14日(月・祝) 18:00開演(17:00開場)

岡山大学鹿田キャンパス Junko Fukutake Hall
 (岡山県岡山市北区鹿田町2丁目5-1)

料金: 500円 (当日会場にてお支払いください)



《ミスターエース》国吉康雄
 1952年 / 福武コレクション蔵

神さまのものでもなく、
 王さまのものでもない、
 音楽とアートの物語

- 主催・企画 国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》
 主催 公益財団法人岡山シンフォニーホール / 第16回おかやま県民文化祭地域フェスティバル
 文化がまちにある! プログラム in 備前実行委員会 / 岡山県 / 公益社団法人岡山県文化連盟
 おかやま県民文化祭実行委員会
 製作 一般社団法人クニヨシパートナーズ
 助成 公益財団法人福武教育文化振興財団
 制作 教養教育科目「クリエイティブ・ディレクター養成」受講生
 「岡山のクリエイティブセクターの活性化を図るプログラム」自主ゼミナール
 後援 岡山県教育委員会 / 岡山市 / 岡山市教育委員会
 協力 研精堂印刷株式会社 / 出石国吉康雄勉強会

文化庁文化芸術振興費補助金
 (劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
 文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

THIS IS MECENAT
 2019



フェスタ
 国立大学2019

国吉祭 2019×Jホールレインボーコンサート

18世紀から19世紀のヨーロッパでは、市民革命を経て、それまで信仰の手段であり王さまや貴族の力を示すためのものだったアートや音楽が「市民」のものとなりました。

さらに19世紀末から20世紀にかけてグローバル化が進み、ドヴォルザークが「新世界」を発表し、ドビュッシーがパリでガムランを聞き、ガーシュインがジャズとクラシック音楽を融合させようとしています。それは、岡山出身の画家、国吉康雄がアメリカで活躍した時代でもありました。この「近代のアメリカ」の「音楽」と「アート」を演奏会、対談で楽しんでもらおうというイベントです。音楽鑑賞、アート鑑賞、講演を別々で楽しむ方々の交流の場所を作り、鑑賞と知的体験を提供します。

国吉祭について

洋画家・国吉康雄を身近に感じてもらうために、国吉作品や最新研究を発表する場として、市民や学生が企画した参加型アートイベントです。第一回目は2013年に、国吉の故郷、岡山市出石町の人たちの手で開催されました。2015年からは岡山大学大学院教育学研究科「国吉康雄研究講座」が参加し、国吉研究に基づいた作品展示やアートワークショップなどを岡山大学と市民有志、東京からのプロスタッフなどと作り上げています。

国吉康雄について



Photo by Sosichi Sunami

国吉康雄は1889（明治22）年、後楽園の門前町として栄えた岡山市北区出石町に生まれました。岡山県工業学校染織科を中退し、日露戦争が終わった翌年、16歳という若さで単身でアメリカに渡りました。アメリカでは苦勞しながら絵を学び、画家として活躍するようになります。1931年、危篤の父親を見舞うために一度だけ帰郷しますが、それ以降はアメリカに拠点を置き、太平洋戦争中は敵性外国人とされながらも自らの信念に従って自由と民主主義を信じ、軍国主義を強く批判しました。戦前、戦後をとおしてアメリカを代表する画家として活躍し、1953年、ニューヨークにて亡くなりました。岡山には世界最大の国吉康雄コレクションがあり、その数は700点を超えます。また、近年の国吉研究・顕彰活動は国内外からも注目をされており、2015年にワシントンにあるスミソニアン・アメリカン・アート・ミュージアムで開催された回顧展には44万人が訪れました。

岡山大学大学院教育学研究科

「国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座」

岡山大学大学院教育学研究科「国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座」（通称、国吉康雄研究講座）では、洋画家、国吉康雄（1889-1953）とその作品を研究しています。「クリエイティブディレクター養成講座」という教養教育科目（一般教養科目）を開講し、同大学の准教授で、クリエイター、国吉康雄の取材を続けている才士真司氏の指導のもと、全学部、全学年から集まった学生が各々のクリエイティブティビティの鍛錬を目標に、国吉祭の企画と運営を行います。

Junko Fukutake Hall について



ホールのコンセプトは「合理的で寛容なボーダレスな出会いの場。自由で愉快的なコミュニケーションを誘発する場・セレンディビティを生み出す場」です。「大学と地域を繋ぐ架け橋となる」という役割を担っており、設計はベネチア国際建築展金獅子賞、米ブリッッカー賞受賞の妹島和世氏と西沢立衛氏の建築家ユニット SANAA。公益財団法人福武教育文化振興財団の前理事長、福武純子氏により寄贈され、国内の優秀な建築作品を表彰する「第56回BCS賞」を受賞しました。

岡山フィルハーモニック管弦楽団

岡山フィルハーモニック管弦楽団は、岡山にゆかりのあるメンバーを中心に優れた演奏者で構成されたプロオーケストラで、岡山シンフォニーホールの完成を機に平成4年に設立。以来、世界の著名な指揮者・ソリストを迎えて開催する定期演奏会をはじめ、若い演奏家の育成事業、青少年の情操教育に資する事業、子育て支援や地元演奏団体との共演等、地域における音楽芸術振興の中心的役割を担っており、公演回数は年間100回を超えています。2013年よりハンスイェルク・シェレンベルガー氏を首席指揮者に迎え、さらに2017年には日本オーケストラ連盟に加盟する等、強化に取り組んでいます。今後も岡山独自の音楽スタイルをもつ「おらがまちのオーケストラ」と皆様から誇りと愛情をいただける楽団へと成長すべく挑戦を続けています。



特別対談

『地域の芸術文化資源としての岡フィルと国吉康雄研究講座の活動』

高次秀明（岡山フィルハーモニック管弦楽団事務局長）

×

才士真司（岡山大学大学院教育学研究科国吉康雄研究講座准教授・クリエイター）

「おらがまちのオーケストラ」であることを掲げて、岡山シンフォニーホールの改革を進める高次事務局長と、国吉康雄をはじめとする、様々な岡山、瀬戸内の芸術文化資源とのコラボイベントを進める国吉康雄研究講座（以降国吉講座）の才士真司とが、今回の国吉祭2019を成立させた岡山の「事情」を語り合いました。



才士（以降S）: 今回、岡山シンフォニーホールさんが、岡山大学や国吉康雄というアーティストの顕彰活動である『国吉祭』とコラボしようと思ったのはどうしてなのでしょう。

高次（以降T）: 元々このJホールで行なっているレインボーコンサートは岡山大学とのプロジェクト。今の榎野学長になって、岡山大学色を出したいという申し入れがありました。それで岡大出身の若手の演奏家とのイベントを企画したりしているんだけど、もっと突っ込んだ芸術ジャンルや学問領域を横断するような学際的な取り組みができるかなと思い、国吉講座との企画を決めました。

S: こういうクラシック音楽とある意味、古典的な技法の芸術家とのコラボイベントってのはあるようでなかなかない。ただ、このJホールも、岡山フィルさんも国吉さんも、岡山の大切な地域文化資源です。このコラボは意味深い。

T: クラシックに関心のある層が世界的に減っていています。演奏者が感情や愛情を表現するクラシックは、人間形成に役立つと思っている。聞いてもらえる機会を増やすために、演奏者からリスナーに歩み寄らないといけない。こういう他の芸術との関連や学術的な情報を仕入れる機会も取り入れて、音楽に触れるハードルを下げていきたい。

S: 高次さんの話を聞いていると改革者や越境者としてのスタンスが見える。

T: 僕は元々行政マンだったから、改革者という意識は実はあまりない。そういう意味で言えば国吉さんこそそうでしょう。岡山が誇る人だ。改革するには越境していかなければならないということを体現している。役所でのキャリアで得た最大の価値観は「パブリックサーバントであれ」ということ。市民に奉仕するということが。市民が納得できるのが大切。岡山は保守的な考え方が強い。絵画やクラシックはこうあるべきだのね。もっと、国吉さんの生き方なんかを知ればいいと思う。

S: 本当に国吉さんは面白いですけど、ただ、岡山には国吉以外にもいいものがたくさんある。金沢のある石川県より国宝、重要文化財多い。北区には文化施設も集まっていて、後楽園から雪舟、夢二、オリエント美術を鑑賞できる施設に、シンフォニーホールが徒歩圏内にある。すごいポテンシャル。ただ、岡山でも顕著に文化に親しむ層が減っている。この資源を生かしきれないというか、この先の現代都市のニーズにも対応できない感じはする。だから、こういう外に出て、他団体、ジャンルとのコラボを進める岡フィルさんの取り組みはとても重要で、その分、責任も重いと考えますが。

T: 何かを決めて、前に進むときは波風が大変。もし、プレイヤーも不満があって、お客さんが減って、スポンサーが呆れるとなれば大変なことなので、僕の責任になる。その原因を見つけられなければ身を引くしかない。ただ、今のところ、年々反応が良くなっているし、お客さんも満足度の高まっている。となれば、責任を意識したり、後ろを向くより、前を向きたい。プラスの価値を出していたら、責任より、「次何をしよう」を考えるしね。

S: 確かにそれは前に向かう力になります。そのマインドが、岡山で文化に親しむ人たちが増えていく運動に繋がればいいな。文化の復権というか、再発見というのがないと、交響楽団や、国吉さんのコレクションの維持も難しくなる。これからの時代、あるだけというのは本当に存続が難しくなる。

T: でも、変化が良いと考える人ばかりじゃない。所謂、「村」の掟的なものや、色に染まっていると、居心地はいいからね。そこに新しい風が吹いてくると排除しようという動きになることだってある。才士さんも経験あるよね。

S: あります（笑）。

T: 元からある人との繋がりという良さは残しつつ、新しい人、価値観をどれだけ許容できるか。それに一番反応が早いのが若い人。だから若手のプレイヤーや学生たちとたくさんコラボをしたいし、応援したい。今回、国吉講座の学生たちとのイベントも、そういう点からとても楽しみにしています。

S: 今、欧米の文化施設では、文化の背景にある、知識や哲学を学ぼうとすると、情報を得て、もう一度体験に戻すという作業が大切だと思います。岡山で4年間学ぶと決めた学生たちに最上の文化的体験をしてもらいたいと思って、国吉さんなんかを使って、文化的、芸術的に色々仕掛けていくというのが今の僕らです。

T: 参加する人の感覚を研ぎ澄ませる。岡山の文化に触れることで感性が開く瞬間があって、そこに学生たちが立ち会えば強いと思う。その体験に対して、次をリリースするだけのポテンシャルは、岡山には本来ある。それが発揮できるシステムがあるといい。

S: はい。その通りだと思います。岡フィルやシンフォニーホールの次の活動に注目しています。今日はありがとうございました。